

「山笑う」ころ

「休眠打破で迎える春」

弥生三月。草木が芽吹きはじめ、山の木々の枝先がふつくらとけぶります。まさしく「春山淡冶たんやにして笑ふが如ごとく」で、「山笑う」は春の季語です。ところで「休眠打破」という言葉があります。桜花は、夏のころに春に咲く花芽を形成して、休眠に入ります。昨夏、枝についた花芽は、冬の刺すような冷気にその身をさらした後、暖かくなるにつれて膨らみ、気温が20度に近づくと開くそうです。

万葉集には梅を詠んだ句が圧倒的に多く、桜を詠んだ句が梅より多くなるのは、編纂へんさん時代の異なる古今和歌集からだといえます。濃厚な香りを放ち続ける梅から、咲きそろうって潔く散る桜へ。思いを寄せる花も、時によって移ろうのは世の習いなのでしょう。さて、二十四節気では「啓けい蟄ちゅう」となり、地中で休眠していた虫たちが姿を現わすころとされます。

休眠する虫たちは、5度以下の低温にさらされることで、



春を感じる鷺尾の森の桜

春を迎えるための変化が体内で進みます。寒い時期を十分に過ごせなかったサナギは、卵もあまり産めないひ弱な成虫になってしまうそうです。

冬は寒く、夏は暑く。季節がきちんと尽くされるのが、自然界には大切なことです。厳しい冬を引き継いだこの春、命の蠢動しゅんどうはいつになく気ぜわしいはずです。春の虫の代表格モンシロチョウの初見が間もなく訪れます。

自然界が春本番を迎えるころ、停滞気味の政治・経済も「休眠打破」になればと願うのは私だけではないでしょう。

指宿市長 豊留悦男